

令和4年度 第44回少年の主張東毛地区大会

令和4年度第44回少年の主張東毛地区大会が、8月20日（土）、太田市藪塚本町文化ホールにて開催されました。

この大会は、中学生が「日頃の生活を通して感じていることや考えていること」を、自分の言葉で発表することにより、社会の一員としての自覚を高めるとともに、少年に対する県民の理解や認識を深め、青少年の健全な成長を願って、毎年開催されています。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、入場者を制限し、前半、後半の2部制で実施しました。

各市町より推薦された19名の発表者は、それぞれの主張を、力強く堂々と発表してくれました。

最優秀賞に選ばれた4名の主張を掲載します。（発表順）

「日本人だからこそ。」

ぐんま国際アカデミー中等部 3年 増田 泉

「Please act as if you are the representatives of Japan. 皆さんは日本を代表する気持ちで、恥ずかしくないように行動しましょう。」小学6年の秋、私は学校のプログラムの一環で約1ヶ月間オーストラリアへ短期留学に行きました。先程の言葉は、留学に先立ち、担任の先生から頂いた言葉です。

オーストラリアへ着いて一週間ほどたったその日、街はハロウィンで賑わっており、ホストファミリーとの夕食中、私達はハロウィンの話で盛り上がりました。すると、日本では10月にどんな行事をするのか聞かれました。「日本も10月はハロウィンかな。かぼちゃ味のものを食べたり、渋谷なんかでは仮装した人たちが大勢集まっているよ。」私がそう言うと、「えっ、ハロウィン？もっと日本っぽい行事ってないの？」と驚いた表情で言われてしまいました。日本で10月にハロウィンを祝うこと自体に間違いはありません。しかし、なんだ、間違えたことを言ってしまった感覚になりました。同時に私は、先生の「日本を代表する」というあの言葉を思い出しました。もっと良い答えがあったのではないか、

「ハロウィン」と答えてしまった私は、本当の日本人と言って良いのか、自己嫌悪に陥ってしまいました。

短期留学から3年余りが過ぎた今、日本には歴史ある年中行事が数多くあることを、強く感じるようになりました。日本列島に暮らしている日本人は、季節に敏感であり、四季の変化が生活リズムを作ってくれていると言っても過言ではありません。日本独自に形成された美しい年中行事は、人々に季節を感じる機会を与え、私達を明るい気持ちにさせてくれます。

核家族化が進む今、日本の伝統的な年中行事を継承する機会が減少し、多くの若い世代の人々は、どんな意味で、どんな目的を持って年中行事を行うのかを理解していないまま、その時期がきたからやるというように考えているのではないのでしょうか。ましてや目的以前に、あのときの私のように、各月の日本の年中行事が言えない、若い人たちもいるのではないのでしょうか。グローバル化による均質化が進む現代社会においては、独自文化への愛と理解を高める必要があるでしょう。歴史ある、四季がはっきりとしたこの国に生まれた私達は日本の伝統的な年中行事を自ら体験し、理解し、愛し、そして継承していく必要があると思います。そのためには、伝統文化の継承という課題に対する、時代に合ったソリューションを導き出すことが重要です。

お正月、節分、ひな祭り、お盆、十五夜。日本の年中行事は家族で行うものが多く、家庭内の文化にとどまってしまう傾向があります。そうすると、文化の発信者は私達の祖父母が主になるでしょう。核家族化による、祖父母との接触の減少によって、年中行事を理解することが困難になってしまいます。もちろん、発達したインターネットを駆使すれば、基本的な情報の獲得や、ビデオ通話を通じた祖父母とのコンタクトは可能です。とはいえ、受け手側の私達は発信者とともに行事をできるわけではないため、不安が生じ、やりたくないという人も出るでしょう。ならば、家庭内文化という形を崩してみてもどうでしょうか。これは単なる一例に過ぎませんが、今、頭に思い浮かぶのは、地域のおじさん、おばさん方の取り組んでくださった正月前の餅搗きです。もくもくと湯気が立ったお米を力強くつく姿を見ていたため、作り方を学ぶとともに感謝の気持ちで食べられました。今は昔のように自分たちで餅をつくことは珍しいと思いますが、家庭よりも規模を拡大し、地域コミュニティで行えば、発信する大人と共に行事を作ることができ、受け継がれてきた伝統に触れられると思います。

何を変えずに、何を変えていくのか。今やコロナウイルスの流行によって地域活動さえ行うのが困難になっています。それでも、ニーズを追い求めて進化することで継承を促すことができると私は信じています。自分もいつか発信する側に立ち、日本の年中行事を伝えていきたいです。歴史ある、美しい四季のあるこの国に生まれた人間だからこそ。日本人だからこそ。

「ありのままの私を生きる」

太田市立南中学校 3年 岡田 莉幸

私には性別がない。私がそう、決めたから。

小学校六年生のとき、私は自分のことを「俺」と呼び始めた。「俺」という言葉を私も使ってみたかったからだ。

しかし、

「『俺』って言うの？ 変なの。」

という周りの友達への反応。母も「俺」という言葉に驚いた顔をしていた。どうして驚かれるのか、私にはよくわからなかった。体つきは女性になっていくし、進学する中学校の制服はスカート。そんな「当たり前」とされていることがとても嫌だった。

同じ悩みを抱える人と話したい。そう感じた私はオープンチャットを開設した。それは、インターネット上で共通の話題について話し合えるサービスのことだ。

「自分の性別について悩んでいる方、話しませんか。」

集まったのは私と同じ世代の人たち。自分の性別について悩んでいる人だけでなく、同性が好きな人、どちらの性も好きな人などが、相談し合える場所になった。

そしてあるとき、衝撃的なことがあった。女の子を好きになった女の子が思い切って相手に告白してみたところ、付き合うことができたというのだ。女の子は男の子としか付き合えない、と思っていた当時の私はとてもびっくりした。同時に、常識にとらわれない生き方をするその子がとてもかっこよく見えた。

しかし、心のモヤモヤは晴れなかった。私は男性として生きたいのか、女性のままでありたいのか。考えれば考えるほど不安になっていき、「自分」が分からなくなった。そんな私を嫌いになりそうだった。

中学生になった。何もかもが不安な私を助け出してくれたのは、入部したバレー部の顧問の先生だった。

「挨拶や返事は大きな声で元気よくしなさい。そうすれば、自分の殻を破れるから。」

顧問の先生のその言葉どおりに実践してみようと思った。部活の練習中や、廊下で先生や友達にすれちがう時。大きな声で挨拶や返事をした。練習中、先輩が出してくれたボールに

「こーい！」

と言ったときは、世界がぱっと明るくなったように感じた。すると、本当に自分

の性格が変わってきた。友達と笑顔で接したり、合唱の指揮者に立候補したりするなんて、以前の自分には考えられないことだった。私はそんな自分が好きになった。

それと同時に、自分のことがはっきりわかるようになってきた。可愛いものよりも格好いいものが好きなこと。髪を切って、男の子の服を着たかったこと。それらを行動に移していくと、自分の好きなところがさらに増えた。

最近はおんなの子の服を楽しむこともある。男でも女でもない、「私」を生きていると感じる。

「わざわざどちらかに決めなくてもいいんじゃない？」

これは、オープンチャットで私の相談相手になってくれる子の何気ない言葉だった。これが今の私にとっては大切な言葉だ。

今、「あなたの性別は何ですか？」と聞かれたら、私はこう答える。

「私の性別はありません。」

私は自分の思いを押し殺して生きたくない。「当たり前」にとらわれず、ありのままの私を生きたい。自分の生き方は自分で決めるのだ。

私の家族はそんな私のことを少しずつ応援してくれるようになった。しかし、私の作ったオープンチャットで出会った友達の中には、自分の性に違和感を抱えながら家族に言えずにいる人や、思い切ってカミングアウトしたところ家族との仲が壊れてしまった人もいる。

私が望むのは、それぞれの生き方に、驚く人も非難する人もいない社会だ。女の子と男の子が付き合うことや性別があることも「当たり前」だが、同性同士で付き合うことや性別がないことも「当たり前」なのだ。ありのままの私たちを認め合うからこそ、優しくて、明るくて、温かい、よい社会になるのだと私は思う。そんな社会が創れたら、どんな人も、今よりもずっとずっと、生きることが楽しくなるはずだ。

「絶 滅」

太田市立強戸中学校 3年 渡辺 結菜

【絶滅】すっかり滅びて絶えること。また滅ぼし絶やすこと。

「絶滅してしまえばいいのに。」と私が心の中で強く叫んだ。忘れもしない、4年前の暑い暑い夏の日のこと。

2018年8月18日の夕方、事件は起こった。私がトイレのドアを開け、スリッパを履こうと下を向いたとき、スリッパの中からガサガサと黒い生き物が

出てきた。ギョッとした。初めての出会いだった。私は、3秒くらい脳が停止したかのように固まり、少し涙目になった瞬間、全速力で逃げ出した。

「どこから入ってきたの？なんでスリッパの中に？ムリムリ、気持ち悪い気持ち悪い…」と思いながら自分の部屋に引きこもってしまった。「もしかしたらトイレにまだいるかもしれない…。この部屋の中にだっているかもしれない…」と思い、不安や恐怖、気持ち悪さなどで吐いてしまいそうだった。そんな中、私は、「ゴキブリなんて絶滅してしまえばいいのに…」と強く願ったのであった。

数日後、洗面所やトイレなどに置かれた殺虫スプレーやゴキブリ退治商品を見て、ふと思った。「ゴキブリが絶滅してしまったら、この商品を作っている会社はどうなってしまうのだろう。」と。当然、その会社のゴキブリ退治商品は売れなくなってしまう、その商品を製造している工場などが稼働しなくなる。

私は、ゴキブリが絶滅してしまったら生き物や地球にどんな影響が出るのかが気になり調べた。ゴキブリがいなくなってしまうと、植物の再生産速度に影響を与えたり、クモやヤモリなどの、ゴキブリを餌にする生き物がいなくなってしまうと、生き物や地球に、さまざまな影響を与えることがわかり、

「みんなが繋がっている」と感じた。ゴキブリは「害」だというイメージしか持っていなかったため、ここで見方を変えることができてよかったと思う。そして、少しずつあんなに嫌いだった虫たちに対して「絶滅」してほしいと願わなくなった。見た目や第一印象だけで勝手に決めつけるのではなく、相手のことをきちんとよく知ることの大切さを学ぶきっかけとなった。

私は、「必要とされていない生き物は存在しない。」と考えるようになった。どんなに嫌われているであろうゴキブリでさえ、必要とされてこの地球上に存在している。このことは、人間にも当てはまることではないかと、私は思うのだ。此の世に生まれたことには意味がある。「私はいない。誰からも必要とされていない。」と感じている人は、まだそのときが来ていないか、必要とされていることに気づいていないかだと、私は思う。

私も、ゴキブリ事件に遭遇するまでは、
「なんで私って生きているんだろう。特にこれといった才能も特技も何もない。怠けてダラダラと過ごすことしかできない。ただの二酸化炭素を吐く、環境に悪い生き物。私っていない生き物だなあ。」

と、自分の存在意義を漠然とだが、見失っていたときがあった。しかし、ほんの些細なことだが、私が存在していて良かったと思うような出来事があった。

ある日、自宅の台所にあるコンロの火がつけっぱなしになっていたのを発見したのだ。このとき、「私がいなかったらどうなっていたんだろう。火事になっていたら…」と考えたら、とても怖くなった。それと同時に、「私っていらな

い生き物じゃなかった。」とも感じた。その日から、私はどんな些細なことでも人の役に立てれば「生きていていいのだ。」と、自分の存在意義を感じられるようになった。

だから、どんな辛い状況の中でも、「私なんていなくなればいい。」そう思い込む必要はないし、そう思わないでほしいと願う。自らを「絶滅」に追い込んでしまったら、必ず悲しむ人が生まれ苦しむ人が存在するはずだ。

皆さんは、自分の存在意義について考えたことがあるだろうか。自分の存在する意味や価値、重要性を見つけたり、感じたりすることができる、自分自身に【自信】を持つことに繋がり、どんな辛いことが起きても乗り越えられる強い心を持てるはずだ。そして、生きがいのある人生を送ることができるのではないだろうか。どんな立場の人でも一人一人に存在意義があり、それを追求することが「生きていく」ということなのではないかと思う。また、そのことを誰かと共有し、認め合うことで、生きていることを強く実感するのだ。今、辛い状況の中にいる多くの人が絶滅の道ではなく、生きる道を選択してほしいと、私は願わざるをえない。そんな世界にするために、私は何ができるか、考えて生きていきたいと思う。

「幸 せ の 輪」

明照学園 樹徳中学校 3年 渡辺 紗

10万円を手にしたらあなたはどうしますか。

私は10万円を受け取りました。特別給付金です。「使い道は自由、ただし、本当に必要なことに使ってほしい。」と母から言われました。

一瞬欲しかったマンガ本が頭をよぎりました。

しかし、「本当に必要なもの」はそれではありません。このお金の有効な使い道を数日間考えました。その結果、私は未来を担いながらも逆境にいる子どもたちに寄付することに決めました。「フードバンク」と「チャイルドスポンサー」です。

「フードバンク」とは、企業や個人などが施設や団体、困窮世帯に食品を提供する仕組みです。フードバンクの要望を問い合わせ、栄養面や賞味期限、価格などを考慮しながら買い出しをしました。一番大切にしたいことは、自分が食べたいと思う食品を選ぶことでした。受け取る人たちの笑顔を想像しながらの買い出しは、非常に充実していました。購入品を桐生市役所に持っていくと、職員の方に「ありがとうございます。とても助かります。」と言

われ、誰かのために直接支援できる喜びを実感しました。

「チャイルドスポンサー」とは、経済が不安定な国や地域に住む人々の支援や、彼らを取り巻く環境を改善することを目的とした制度です。スポンサーの申請後、どんな子の担当になるのかワクワクしながら待っていると、女の子の顔写真が添えられた返信が届きました。タンザニアに住む8歳のパウリナヤコボちゃんという子でした。早速、彼女の住む町を地図で調べました。この地域に住む人々の80%以上が1日1ドル以下の生活で、年間を通じて十分な食料が得られないそうです。私は毎月定額を寄付しています。とは言え彼女たちが簡単に貧困から解放されるわけではありません。しかし、ささやかではあれ、寄付の継続が彼女たちの境遇をきっと改善させるはずだ、と私は信じています。チャイルドスポンサーはフードバンクとは異なり、自分が選んだ物を直接届ける制度ではありません。しかし、写真や動画などで定期的に相手の情報を受け取ることで、私の思いが確実に届いていることを実感できます。行ったことがない国、会ったことがない人々に、遠く離れている私にもできることがあるという幸せを味わっています。

これらの寄付活動を今後も継続していくためにはどうしたらよいか、家族で話し合いました。そこで決めたことは次の2つです。まず、私のお小遣いやお年玉の一部を寄付にあてること、そして家族にも協力を仰ぎ、セール品やクーポンを利用した際の定価との差額から寄付金を捻出すること、です。

寄付活動を公表することに対して、「偽善者だ」とか「匿名で行うべきだ」と否定的な意見を述べる人もいます。特に日本人は「不言実行」を美德とする感覚が根強く残っています。しかし、私はそうは思いません。人を助けることをあえて公表し、みんなに知っていただくことは重要なことです。なぜなら、ある人の慈善活動の公表が他の人の慈善活動への参加を促すこともあるからです。実際、私のヘアドネーションの経験を話したことがきっかけで、友達がヘアドネーションに挑戦すると言ってくれたのです。うれしかったです。こんな喜びもあるということを知りました。幸せの輪が広がった瞬間でした。実は、自分の労力や時間、お金などのコストを負いながら、他者に利益を与える利他的行動をとると、自分の幸福度が上がるということがわかってきています。私たち一人一人が、無理のないできる範囲の利他的行動を取ることで、周りが幸せになるとともに自分も幸せになれるのです。その「幸せの輪」があちこちで広がっていくことで、社会全体が幸せで満ち溢れるならば、こんなすばらしいことはありません。

みなさん、ぜひその一歩を一緒に踏み出し、「幸せの輪」を広げてみませんか。

